

ファンタジック・ストーリー

第二話

誇りと責務 (上)

夜風

ジャンル:王道系ファンタジー

文字数:37kB(18255 文字)

前作あらすじ:

初めての冒険でいきなり失われた文明の遺跡に遭遇した
アルクたち、そこには危機と奇跡と新たな家族が待っていた！

自らを戦闘機人と名乗るフィオンを新たに家族に向かえ

今日も小さな大冒険が始まる！

今作は王都の中でのシティアドベンチャー！

長いので暇な時に、気楽に読んでください。

エオイア王国の中央区画、一見して富と栄華が見てとれる住宅地の中心部。

大きな屋敷の中庭に面した廊下。

技巧を凝らした飾り柱の頂点に、女神の石造が微笑む。

中庭の噴水が水を吹き上げ虹を作り、小鳥たちがその光を飛び越えていく。

そんな天界の楽園のような風景に、声変わり前の少年の声が響く。

「お嬢様！ エリスお嬢様！ お待ちください！」

フォーマルな執事服に身を包んだ少年が、短く整えられた翠色の髪を揺らしながら走っている。

彼の向かう先、声をかける相手は、そんな彼に一瞥もくれず肩で風を切りながら進んでいく。

「お嬢様！ どうかお気を静めてください！ 旦那様も悪気があって仰ったわけでは——」

「うるさいわ！」

騒ぐ少年にしびれを切らしてか、振り返りながら『お嬢様』と呼ばれ続けた少女が振り向く。

丁寧に整えられた金色の縦巻きカールの髪が揺れ、豪華なカジュアルドレスの裾が広がる。

強い意志のみなざる金色の瞳は明らかな不満の色をたたえ、白く滑らかな美しい肌も、今は僅かに朱を帯び上気している。

「なに！？ あなたも反対するの！？」

半端な意思の者ならば無条件に圧倒されてしまうような怒声を浴びつつも、少年は食い下がる。

「ですから、あまりに危険です！」

「まったく……結局父上の言いなりになっているだけでしょう！」

「違います！ 僕はただ……」

「ただ、何よ？」

「その……なんというか……」

激昂する少女に対し、少年はもやもやとした返事を返すしかできなかった。

「まったく！ 女々しいわ！」

最後に少年に言い捨て、少女は踵を返し再び通路を進む。

「負けっぱなしじゃだめなのよ……王族の血を引くこのエリザベス・フィエルネ・エルフェルトが……一般市民に後れを取るなんて……！」

小さなこぶしを握り締め、よく通る声を張り上げる。

「セレン・イロナカート、覚えていなさいよー！！」

「お嬢様！ 抑えてください！」

* * *

「ん？ お兄ちゃん、呼んだ？」

「いや？ 呼んでないけど」

フライパンを片手に振り向くセレンに、視線をやることなく答える。

「そう。あ、フィオナさんはベーコン何枚食べますか？」

薫製肉を厚切りにしながらセレンが尋ねると、間髪入れずにフィオンが返事をする。

「生体維持に必要なエネルギーは十分にあります」

「……お肉、嫌いですか？」

肉を切る手を止めながら、セレンが聞くと、またも素早く返事が返ってくる。

「食品の経口摂取によるエネルギー補給は不可能です」

「…………お兄ちゃん？」

「俺に振るなよ」

正直そんなこと言われてもわからない。

ただ、昨晚もジェラルドの家では食事をとってはいないし、そもそも出会ってから何も食べてはいない。ジェラルドたちの村から出発して、ほぼ一日。

朝食を用意しながらセレンはちらちらとフィオンの様子を伺う。

「どうぞ、セレン様。如何なる御用も御申し付け下さいませ」

「え、ええとじゃあ……お皿を出しておいてもらえますか？」

「了解しました」

セレンの言葉に返事をし、戸棚へとフィオンが向かう。

戸を開き、食器が擦れる音を立てることもなく取り出し、並べていく。

その姿はさながら王宮に使える優秀な侍女のようでもある。

「セレンさん、何でもできるなあ」

「フィオンは如何なる状況にも完璧に対処します」

小さく言葉をこぼすと、すかさずフィオンが言葉を返す。

『す……すごいですね』

二人の戸惑いの声が和した。

二人分の朝食が並べられた食卓に三人が着く。

二人が食事をしている間も、フィオンは微動だにしない。

セレンが気を利かせてか、一応コップにミルクを入れて置いてあるも、それさえシュールに映る。

「ん……」

「んぐ……」

もとより食事中的の会話は多いほうではなかったが、何か話さなければならないような雰囲気とする。なぜか乾くのどにミルクを流してから、セレンに声をかける。

「あー、そうだ。休み前になんかの大会があるって言ってたよな。あれどうなった？」

「えーと、総合魔術実技試験大会のこと？」

同じく、スムーズにフォークの進まないセレンが応える。

「たぶんそれだ。長期休暇に入る前の試験だろ？」

「うん」

「で、なんだ？ それって。結局大会があるってしか聞いてなかったけど、どんなのさ？」

「まんまだよ。生徒同士で自由に魔法で戦うの、予選はリーグ、決勝はトーナメント」

「魔法で戦う！？ 危なくないのか！？」

アルクの目にした魔法というものはどれも強力なものだ。

あくまで主観ではあるが。

「大丈夫だよ。先生が防壁も張ってくれるし」

「へえ……で、どうだったんだ？」

「結果？ 優勝したよ」

何を当然、とって様子で返すセレンにアルクは素直に感心する。

「おお、さすが。強いなセレンは」

「そ、そんなことないよ。決勝なんて相手が詠唱中に速攻魔法で倒しただけだし」

「ふーん」

* * *

エオイア王立魔法学校、総合魔術実技試験大会

その決勝。

100メートル四方はあろうかという広大な中庭で二人の少女が対峙する。

片方は様々な術式効果が織り込まれた、見るも眩しいバトルドレスに身を包み、煌びやかな装飾を施された杖を手に構える。

一方でセレンは手縫いの後が見て取れるローブに、飾り気のないシンプルな杖を手に佇む。

あらゆる点で対極をなす二人は、今はただ対等な相手として向かい合っていた。

二人をドーム状に覆う防御壁の向こうには、この決勝を見ようと多くの生徒が駆けつけていた。

「エリザベス・フィエルネ・エルフェルト、セレン・イロナカート、準備はよろしいですね？」

「はい！ いつでも！」

「ええ！ よろしくてよ！」

審判代わりの教員に声をかけられ二人が僅かに構える。

「エリザベス様ー！ どうかご武運をー！」

「頑張ってくださいーい！」

セレンの対峙する相手、エリザベスに女生徒から黄色い声援が飛ぶ。

その他多くの者たちが声援を送るが、そのほとんどはエリザベスを後押しするものだ。

「……………すう」

しかしセレンはそれに動じることなく、瞳を閉じ、深く息を吸う。

「それでは、始め！」

合図とともに中庭を埋め尽くしていた声援がピタリと止んだ。

代わりに張りつめた空気を、二人の魔導師の力が満たしていく。

「すぐに終わらせてあげるわ！」

エリザベスが杖を掲げると、足元に何重もの魔法陣が現れる。

いずれも力を顕在化する術式に埋め尽くされたもので、エリザベスの髪と同じ色、金色の光を放つ。

「————！」

しかし、エリザベスが術を放つ前にセレンが弾丸のように飛び出した。

杖を槍のように突き出し、整えられた芝生を蹴り、疾走する。

「馬鹿正直な突撃ね……いいわ！ 正面から潰してあげる！」

嘲笑を含んだ一言の後、エリザベスの魔法陣が一層輝きを増していく。

「我が名の下に、神罰を下さん。 来よ、雷の鉄槌！」

セレンとエリザベスの間を遮るように、金色の魔法陣が出現する。

そしてその中央に閃光が収束し——

「『バースト・サンダー』！」

弾けた。

凝縮された魔力の流れが、真っ直ぐに突撃してきたセレンごと空間を貫く。

弾けるスパーク音と目映い閃光のみが空間を支配する。

吹き飛ばされた芝生は焦げることすら許されず、抉られた地面ごと消失していく。

「すごっ！」

「あれが王族の……」

「圧倒的じゃない」

「相手の子、生きてるかしら」

「さすが、エリザベス様！」

金色の光に目を細めながら、観客が声を漏らす。

あるものはエリザベスを称え、あるものはセレンの身を心配する。

魔力の奔流が空間を震わせ、周囲を大気ごと揺らした。

勝負は一撃で決まった。

誰もがそう思った。

しかし

「たあああああつ！」

迸る閃光を引き裂き、セレンが駆け抜ける。

「なっ！」

エリザベスが驚愕の表情を浮かべる間に、セレンは光を放ち続ける魔法陣に左掌をかざす。

『『ライトニング・ライン』！』

そう叫ぶと、手のひらから放たれた電撃が魔法陣を貫いた。

「このっ！ そんな初歩呪文で！」

魔法陣を砕いたセレンを狙い、再びエリザベスが詠唱を開始する。

しかし、その選択は誤りだった。

詠唱に入り、無防備となったエリザベスにセレンが杖を向ける。

（さっきの防壁から詠唱はしていないはずっ！ まさか連続無詠唱！？）

驚きに見開かれたエリザベスの瞳に、セレンの生み出した力が映し出された。

「いっけえ！ 『ファイア・スプリングル』！」

小さな炎の塊が、驟雨のように浴びせられる。

完全に虚を突かれる形となったエリザベスはその全てをまともに受けた。

「きゃあっ！」

悲鳴とともにエリザベスが尻餅をつく。

バトルドレスと障壁によって外傷はないが、十分に勝負を決定づける一撃だった。

「そこまで！」

かくして、セレンとエリザベスの戦いは僅か 30 秒ほどで終わった。

* * *

「で、お兄ちゃんは今日を何するの？」

「今日はギルドに行ってくる。フィオンさんの分のパーティ登録もしておきたいし」

「パーティ登録って……フィオンさんにもお仕事させるの？」

「いや、別に登録しておくだけでも構わないし……」

別にかまわないだろう、といった様子のアルクにセレンがかみついた。

「私の時は、あんなにダメだって言ったのに！」

「いや、そうはいつでも……」

セレン参加時には渋りまくったアルクが、フィオンの参加には積極的であることに不満なのだろう。

そんなセレンをなだめるようにアルクが説明をする。

「これから『ああいう』討伐依頼とかがあったら、まずフィオンさんも来るだろ？」

「……うん、たぶん」

「で、その時にパーティ登録してなかったら交通費とかの申請ができなくなるんだよ」

「……リアルな事情だね」

「まあ……うちにはお金がないからな」

お金がないから仕方がない。金銭に余裕のないイロナカート家にとってこれは絶対の言葉だった。

「というわけで、ちょっとフィオンさんとギルドに行ってくる。ついでに小金が稼げそうな仕事も探してくるよ」

「わかった。私は今日は友達と約束があるから、学校に行ってくるね。夕飯の準備までには帰ってくるから」

「別に少しくらい遅くなってもいいぞ。夕飯の準備はおれがやとくから」

「いいの！ 学校にはレンピ本もたくさんあるんだから」

「ん、じゃあよろしく頼むな」

「任せておいて！」

「それじゃ、フィオンさん。行きましょうか」

アルクの呼びかけに、これまでいっさい沈黙を保ってきたフィオンがようやく口を開いた。

「はい」

自宅からギルドまでの慣れた道を進んでいく。

しかし、気になることが一つ。

「あの……フィオンさん？」

「はい。何でしょう」

「どうしてそんな斜め後ろを歩くんですか？」

「従者たるもの、主の視界を妨げるような行為は致しません」

「え……あ、はい」

余りにきっぱりとした言いように、反論の余地もなかった。

微妙な気まずさとともに、ギルドに到着する。

「ここです。入りましょう」

「畏まりました。扉を御開けいたします」

「ああ……ありがとう」

時間はまだ朝早い。

しかし、酒場以外にも宿泊施設の機能を持つ店の中には何人かが思い思いにくつろいでいた。その多くはこのギルドに属し、依頼をこなして生計を立てている者たちだ。当然のように華奢、華麗といった言葉からはほど遠い者が多い。店に入ると、そんな常連客がアルクに声をかけようとし、後ろに控えるフィオンを見てその言葉を飲み込んだ。

(やっぱり不釣り合いだよなあ……)

手入れは行き届いてはいるものの、ここは荒くれ者の集うギルド酒場。ジェラルドの村で用意したフリル付きのワンピース姿のフィオンは、その美しさも相まってかなり目立つ。

「おおお……」

誰のものともしれない感嘆の声が聞こえてくる。

「はあ……」

「いかがされましたか」

「いや、何でもないよ」

ため息に返事を返すフィオンに言葉をかけてから、カウンターの向こうで大きな背を向けているレジアスに声をかける。

「おっさん。パーティー増加だ」

「あん？ アルクか？ 心配しなくてもセレンちゃんの方はちゃんと手続きしたぜ？」

「じゃなくて、もう一人ってこと」

「もう一人？ そいつはいつてえ……のうわあ！」

グラスを置き、振り返ったレジアスが素っ頓狂な声を上げた。

そしてそのままカウンターから身を乗り出し、アルクの肩を両手でつかんだ。

「おいアルク……一体どこであんな別嬪さん捕まえてきた!?!」

「え？ あー、話すと長いわけで」

「おめえにしちゃあ、随分やったもんだなあ！ でもよ、セレンちゃんは大丈夫か？」

「は？ 何が？」

何か、何かがズレている。

「そりやお前……嫁さん貰ったとなったらー」

「え？ フィオンさんは別に嫁ってわけじゃないけど」

「ああ？」

そういうとレジアスは、アルクの肩を掴んだまま顔をフィオンに向けた。

「私、フィオンはアルク様の忠実な僕に御座います」

「……………」

固まるレジアスに、アルクが声をかける。

「おっさん？」

しかし次に返ってきたのは鼓膜を突き破らんばかりの怒声だった。

「アルク！ お前って奴はあ！ 身売りにだけは手を出すなってー」

「んなっ!? そんなことしてねえよ！」

鼓膜を突き破らんばかりの大声に、アルクも叫び返す。

「ああ！ 俺がもうちょっとこいつをしっかりと育てていけば！」

掌で顔を覆い、悲観するレジアス。どうやらこのままではまともな会話は出来そうにもない。

「埒があかねえ……フィオンさん！」

「如何致しましょう」

「ちょっと静かにさせて」

本人の口から説明させればレジアスも納得するだろう。

しかし、アルクのその考えは間違えだった。

「畏まりました」

そういつて、フィオンは流れるような動作でカウンターを飛び越え、音もなくレジアスの背後に回り、そして

「失礼します」

レジアスの首筋に手刀を叩き込んだ。

「うぐふっ！」

レジアスの巨体がカウンターの向こう側に沈んでいく。

「対象の鎮静に成功しました」

「……………」

「如何されましたか」

「……そうじゃない。そうじゃないんだ……」

何事かと立ち上がる客たちにどう説明したらいいか。

アルクの苦労は絶えないのであった。

* * *

一方そのころセレンは、王立魔法学校へと向かっていた。

王都外周部から中心部に向け移動するにつれ、周囲の風景も変わってくる。

行き交う人々は姿を減らし、威勢のいい掛け声の商人は高級品を扱う上品な店舗に変わられる。

周囲の家屋は、セレン達の住むそれと比べれば小屋と城ほどの差がある。

そんな中でも、さらに大きな建物があつた。

門番に守られ、学術関係者や学生以外は堅く進入が禁じられている建造物。

それがエオイア王立魔法学校である。

守衛に学生証を見せ、特に気後れする様子もなく校舎内へとセレンが進む。

(まだ時間はあるから、先に図書館へ行こうかな……)

長期休暇中の学内は人気は少ない。数少ない学生も、セレンの姿を見て、遠巻きに視線を送るだけである。

「おい……あれ……」

「あいつが……」

「王族を倒したんですってよ……」

「強いと言うより、怖いもの知らずですわね……」

セレンとエリザベスの戦いとその結果は、学内のほぼ全ての者が知るところとなっていた。

(……まあ、他人の噂なんてどうでもいいけど)

王都において、例え試合でも王族に本気で手をあげるということは、心情的には難しい。

しかし、セレンは躊躇なくそれを成し遂げた。

理由はただ一つ。

(ともかく、これで来期の奨学金ゲットは堅いかな)

返還不要の奨学金、重くのしかかる学費を何とかこなすにはそれしかないのだ。

給付が受けられないことと、退学はセレンにとってはイコールである。

中庭に面した通路を歩き、大きな扉を開けて、セレンが図書室に入っていく。

重く大きな扉をくぐると、明かりの少ない空間にでる。

丁寧な清掃は行き届いているものの、どこか埃っぽさを感じさせる空間。

誰に命じられたわけでもないのに思わず会話をするのを憚られるような空気。

魔法学校の図書館とはそんな場所であつた。

暖色系の魔法灯に照らされた書架は広く長く部屋の奥まで続いており、そこには歴史書から学術書、貴重な魔法書など様々な書物が保管されている。

今回セレンが学校にきたのはここに訪れるのが目的ではない。

しかし訪れる理由はあった。

閲覧用の椅子に座るとポーチから一つの手紙を取り出す。

非常に高価な上白紙にはインク文字で

『先の雪辱を晴らさんが為、再戦を申し込む エリザベス』

と書かれている。

エリザベスとはもちろん王家の一族のエリザベス・イェルネ・エルフェルトのことである。

エリザベスにとってはこの間の敗北は自身のプライドが許さないのだろう。

「はぁ……」

ため息を一つつき、椅子の背に深くもたれる。

(……まあ別に奨学金とか関係ないし、勝っても負けても良いかなあ)

セレンにとってはまさにどうでも良いことであった。むしろ相手が満足するなら負けてあげても良いと思っていた。

ともかく王族相手に行動をすることがセレンには疲れるのだ。相手は最高権力集団、事を起こす前に関わらない方が良いに決まっている。

もう一つため息をつくセレンの後ろから小さな影が迫っていた。

「ど~したのっ！ せれにゃん！」

「うわぁ！」

後ろから飛びつかれ驚くセレンの首もとに細い腕が絡みついた。

「ど~したのん？ アンニユイなため息なんかついちゃって~」

「ちょっと、アリア……ここ図書館だよ？」

「い~じゃんちょっとくらいさあ。ど~せ誰もいないんだし？」

「そうだけど……」

アリアと呼ばれた少女はセレンから腕を放し隣の椅子に飛び乗った。

背丈は比較的小柄なセレンよりさらに小さい。腰まで伸びる黒のロングテールの根本には赤いリボンが結ばれており、同じ色の瞳には好奇心の光が宿る。椅子にちょこんと座ってこちらを見る様子は子猫を思わせる。

アリアは学業一筋のセレンにとって数少ない学友だった。

「ほれほれ~話してご覧なさい♪ ん！ これがそうかにゃ~？」

目ざとく手紙を見つけると、セレンの手から素早く奪い取る。

「ちょっと、アリア！ それ取らないでよ！」

「うおう！ 最高級上白紙じゃ~ん！ ひょっとして殿方からのラブレ……んなっ！」

セレンの制止を無視し、手紙を開くとアリアは素っ頓狂な声を上げた。

それも当然。

実質王族からの果たし状である。

「せれにゃん……相変わらずぶっ飛んだことしてるね~」

「いや、別に私じゃないから。向こうが言ってきたことだし」

「で、もちろんどっカーンとやっちゃうわけだね♪」

「いや、そもそも私闘は禁止だよ……」

魔法学校にいるという事はそれなり以上の良家のものであるという事でもある。

奨学金を得ているセレンはともかく、アリアもまた大きな商家の娘だった。

「さすがせれにゃん。私たちには出来ないことをやってのける！」

「だからやらないってば！」

しかし持ち前の人なつつこさから学校で浮いていたセレンにまわりつきまくり、その結果セレンが唯一友人と認める存在となった。

「で、せれにゃん。ここで時間つぶしてるの？」

「そうだよ」

「え～、カフェとか行こ～よ」

「だめだよ、お金ないし。それにちょっと調べたいこともあるしね」

「え？ エリリンを一撃でやっつける魔法とか？」

エリリンとはエリザベスの愛称である。

もっともアリスしか使用しておらず、エリザベス本人もその名で呼ばれるのを嫌っているが。

「そんな物騒なのじゃないよ。ちょっと歴史書をね」

「歴史？ なんか調べるの？」

「うん。 アヴェンツ帝国の末期について調べようと思って」

「アヴェンツ……あ～エゲツナイ戦争して終わった国か～。でも何で？」

「……何でも」

「返事が遅いにゃ～」

「うるさい」

「まあ、いいや。探すの手伝ってあげるよ～。暇だしね！」

「ありがとう。じゃあ歴史書は確か……」

5分後、机の上には数冊の歴史書が並んでいた。

この広い図書館から見つけ出した割には随分と早い。

「せれにゃん……」

「ん？ どうしたの？」

「ひょっとしてどこに何があるか知ってる？」

「大体ね。結構よくきてるし」

これくらい普通、といった感じで言いわけのけるセレンにアリアがわざとらしさすら感じられるほど大きく驚いた。

「さすが！ あたしなんか本みたら売値しか興味ないよ！」

「売らないでよ!？」

「……価格によりますにゃ」

「はあ……」

「で、主に何を調べるの？」

「ええと、戦争の道具かな」

「……やっぱりエリリン対策かにゃ～」

「違うって！」

「他には何を調べたらいいのかにゃ？」

「……ええと、確か……『機人』」

「キジン？ 機械の人？」

「そう、その機人。じゃあアリアは戦史から探してみて。私は技術史から探すから」

「任せておけ～」

さらに数分後。

凄まじいスピードでページをめくりながら、これまでに得た情報を脳内で整理していく。

（やっぱりこのオートサーヴァントってのがそうみたいね。基本は従者、召使いの用途が主。識別のために四肢は人工物で作られている。軍事転用は……記述がないわね）

すさまじい速度でページをめくるセレンとは対照的に、アリアは一ページずつじっくりと目を通していく。

「くぁ～、やっぱアヴェンツってところはエゲツないにゃ～」

「ん？ どうしたの？」

「いや、この国、戦争で終わったんだけどね？ 本来は技術産業で成り立ってたんだってさ。で、戦時にはその高い技術力を生かしているいろいろ作ってたんだって」

「へえー、オートサーヴァントについて何か記述はある？」

「ん～と、戦争末期には人造兵士として作る計画はあったみたいだよ、でもその前に終戦しちゃったね。ま、終戦って言っても帝国消滅だけど」

（するとやっぱりフィオンさんは最初で最後の戦闘機人ってこと？ 自分のことを従者って認識するのはオートサーヴァントに一致しているし。手足はどう見てもナマモノじゃないし）

セレンに戦史書を渡し、手持ちぶさたとなったアリアが適当な技術書を手に取り、ぱらぱらとページをめくる。そしてあるページで手が止まり、アリアの目が驚きに見開かれた。

「うおう！」

「うるさいよ」

「いやいや、見てみて見てよ！ それにゃんこれ！ すっごいよ！」

アリアが差し出した本のページには、難解な図形と説明文が書かれていた。

「ん？ ええと、『タクティカル・クリエイションシステム』……クリエイションシステム!？」

「これすごいよね。『持ち主に最適な武器形状に自在に変化するよう考案された魔導具。製造コストの高さと、運用するにあたり莫大な魔力が必要なことから構想段階で破棄されたものである。数種の資料にその用語が確認されるのみに留まる。もちろん現在その存在は確認されていない』だって。なんだ無いのか」

（これ……フィオンさんがお兄ちゃんの銃のことをこう言ってたはず……でもどうしてそんなものが）

「これ欲し～よね。こんなのあったら最強じゃん」

（てっきり珍しい魔法道具程度だと思ってたけど……こんなに凄いものだったなんて……いや、でも偽造品ってことも……）

「もしあったら、一千万で買っても利益はでるね！」

「う、売らないよ!？」

「ん？」

「えっ、あっ！ も、もしそんなの持っても自分で使った方が良いんじゃない？」

商魂逞しいアリアに感づかれてはたまらないと、あわててセレンが話を逸らそうとする。

「う～む、そうかにゃ～。 戦闘なんてそうしないし……使う人に売っちゃうのが一番お得だよ～？」

「さすが商売人の娘……」

「んーで」

「ん？」

「何か心当たりが有るのかにゃ～？」

どうやらセレンの思惑は失敗したようだ。金貨のように目を輝かせながらアリアがセレンに詰め寄る。

「ふえ？」

「せれにゃんは隠し事が下手だにゃ～」

「そ、そんなことないわよ、ですわよ……？」

「く、口調すら変わってるにゃ……。さて！ 包み隠さずしっかりガッポリ聞かせるにゃ！」

「ガッポリって！ 売る気しかしないんだけど！ こればかりは言えないよ！」

「そっか、それは残念だにゃー」

口ではそう言っているものの、アリアに諦めの表情は見えない。きっとまだどこまでもまとわりついてくるのだろう。

「はぁ……っと、そろそろ時間だから行ってくるね」

「おうっ！ アリアも応援してあげるよ」

「はいはい。でも手出し無用だから」

「お～なかなかの自信でございますにゃ～」

(……また難癖付けられたらたまらないしね)

再び重い扉を開き、二人が出て行く。

誰もいなくなった図書室は再び元の静けさを取り戻した。

ふっ、と影が揺らめくがそれを見たものは誰もいない。

* * *

「…って言うわけ、これでわかった？」

「……おめえ、よく生きて帰ってきたなあ」

アルクは先の依頼の顛末、フィオンが如何にしてアルクとセレンにつき従うようになったかを説明した。

話の途中、何度もレジアスの顔が強ばり、話し終わる頃には取り落として割ったグラスの数は三つになっていた。

「で、この嬢ちゃん。あー、フィオン嬢だっけか？ 本当に怪しい奴じゃないんだな？」

レジアスの視線を受け、フィオンが平坦な口調で応える。

「怪しい奴、とは如何なる意味でしょうか？」

表情を一段と真剣なものに変えて、レジアスが続ける。

「俺はな、こいつらをガキの頃からずっと見てきてんだ。いわば俺の子供みたいなもんなんだよ」

「おっさん……」

「で、急に同居人が増えるってのは、そりゃもう心配にもなる」

「……把握いたしました」

「あん？」

言葉を受けたフィオンが片膝をつき、明朗な口調で述べていく。

「千余年の時を越え、我が主と成られたアルク様、セレン様は私の全存在をかけて、従い、尽くし、御守りすべき御方に御座います。如何なる艱難辛苦からもこのフィオンが盾となり御二方を御守りいたします」

「……」

「ほお……言ってくれるじゃねえか」

フィオンの口上にレジアスは口角を上げて応えた。

「ま、正直なところ、アルクにこんな美人はもったいねえってただけだよ！」

「おい、おっさん！」

「ともかく、フィオン嬢をパーティ登録だな。『ステイタス』かけるから抵抗しないでくれよ」

「アルク様、如何様に」

「うん、抵抗しないであげて、別に害はありませんから」

「畏まりました」

「はいじゃ、『ステイタス』っと」

以前のセレンと同じく、フィオンの周りに様々な数字が浮かんでいく。

はずだった。

浮かびかけた数字は、列を成す前に霧散していく。

「……あれ、おっさん？ 魔法は？」

「もうかけてんだが……」

「抵抗はしていません」

「……あーわかんねえな」

「え？ じゃあ登録はどうなの？」

「仕方ねえ、とりあえず生物装備扱いで登録しとくか」

生物登録、それは龍騎士の竜であったり、聖騎士のペガサスであったり。

「なんか……」

「いや……まあ、何とかなるだろ」

窮屈そうに屈み、手元の紙に書き込んでいく。

「ええと、名前は」

「個体名称は **FION** です」

「あつ、それに姓はイロナカートで」

「アルク様？」

疑問を呈するフィオンをよそにレジアスが角張った文字を書き込んでいく。

「あいよ、『フィオン・イロナカート』とな、で属種は……」

「独立型戦闘機人に御座います」

「……じゃあそうしておくか」

「で、仕事か？」

「ああ。なるべく早く終わりそうなので頼むよ」

「おう、ちょっと待っておけ」

そういうとカウンターの向こうから筒に入った依頼書を持ち出した。

「なに？ 何で筒に入ってるの？」

「まあ、気にすんなや。ほれ、これが内容だ」

「うわ、すごいきれいな紙だな。ええと、魔道具の鑑定？」

「おう、骨董商から手に入れた物が魔道具関連だったらしくな、その鑑定だ」

丸められた紙を引き延ばしながらアルクはため息をついた。

「あー苦手かもな、そういうの」

「そいつは分かってる。ほれ、ここを見ろ」

レジアスが指した部分には脚注があり、そこには

『仲介協力でも報酬の四分の一を支払う』

と書いてある。

「つまり分かる人を捜すのだけでも報酬がもらえるってこと？」

「ああ。いるだろ？ お前の知人で『そういうの』が」

「師匠ねえ……また小言言われそうだけど。報酬は？」

「四分の一で二万だ」

「……なんて？」

アルクが聞き返す。ちなみにエオイアで慎ましく生活を送るなら、一人当たり一日 100 ゴールドでお釣りがくる。

「四分の一で二万だ」

「はぁ!？」

「ここみろ、ここ」

レジアスが再び指さす。

依頼書の最下部には、花の印と共に依頼者の名前があった。

『ベルード・フィエルネ・エルフェルト公爵』

公爵、それは王位継承権を持つもののみが名乗ることを許されるもの。

つまり、この王都における最高権力者集団の一人である。

「……」

「相手は王族だ。報酬に出し渋りはねえぜ」

「……まじっすか」

出し渋りはともかく相手は王族、不敬と見られる行動と死はイコールである。

「……………」

「位置情報を確認しました。最短・最安全ルートで案内が可能です」

「さすがフィオン嬢、頼りになるなあ！」

「ほんとに!？」

「ほんとかよ……」

半ば夢見気分でギルドを出発したアルク。妙にふわふわする足取りでフィオンについて行き、到着したのは豪華な屋敷の門の前だ。

「到着いたしました。こちらが公爵の屋敷となります」

簡素とはいえドレスを着ているフィオンはともかく、普段着姿のアルクは場違いにもほど遠い。

「あの、フィオンさん……いったん出直すというのは……」

「如何なる理由にて御座いますか？ 依頼主は迅速な解決を望んでおり、またアルク様も本日夕餉までの依頼完了が必須となっております」

「夕餉……夕食？ ああ、セレンが作るっていったな。いやでもさすがに、ドレスコードとか……」

屋敷の前で話し合う二人を不審に思っか、武装した門番が二人に声をかけてきた。

「その二人、この館の主に何か用が？」

「ええと……」

応えあぐねるアルクに対し、門番は尊大に続ける。

「この館は、ハルベルト王の従兄弟であられるベルード公爵の館だ。用もなくうろついてよい場所ではないぞ」

(もう、腹をくくるしかねえな)

小さく息をつき、張りのある声で門番に告げる。

「失礼しました。私たちは公認ギルド『宵の風』よりベルード公爵の依頼を受けたものです」

背筋を伸ばし、声を張るアルク。もうここまできたら引き下がるわけにはいかない。

「ああ。ギルドの者か。依頼書を見せ、名を名乗れ」

「私はアルク・イロナカートです。そしてこちらが」

「イロナカートの従者フィオンです」

「分かった。……依頼書も確かな物のようだな。これより公爵に取り次ぎを行う。しばし待て」

「分かりました」

依頼書を抱えた門番が館に入った後、次に館から現れたのはアルクよりも年下にみられる少年だった。

「あなた方がギルドからお越しいただいた方ですね？」

翠色の髪を揺らし少年が駆け寄る。

声変わり前の声、小さな体つきなので遠目には少女にも見える。

「ああ。内容は魔道具の鑑定だったはずだ」

年下に見え、そう高い位でもなさそうなので思わずアルクはいつも通りの声色で返した。

しかしそのことにまずいと思う間もなく、少年が質問をしてきた。

「……あの、ところで、セレン・イロナカートという方をご存じですか？」

「ん？ セレンは、俺の妹だけど」

「ああ！ 姓が同じだからもしかしたらと思いましたが、まさかそうだとは！」

「ええ!? な、なんか妹がやらかしました!?!」

王家に名前を覚えられている。そのことに対してあまり楽観的にはなれない。

慌てた様子で返すアルクをなだめるように少年は声のトーンを落とした。

「いえ……そういうわけではありませんが……」

「アルク様、依頼遂行の件をお忘れなきよう」

「ああ。そうだな」

「そうでしたね。それではこの話は追々ということで。あっ、申し遅れました、私はベルード様の御息女の護衛をしております『ルカ』と申します」

（うわっ！ 令嬢の執事だったか！）

執事自身に身分も何もないが、位の高いものに使えているということはそれなりの対応をせねばならない。

思わず言葉に詰まったアルクに、ルカが微笑みながら反応した。

「私自身は使える身でありますから、普段どおりの言葉遣いでかまいませんよ」

「あ、ありがとう。ええと、俺はアルク、でこっちは」

「イロナカートの従者、フィオンに御座います」

名前を告げる二人に一礼した後、ルカは二人を屋敷の奥へと案内していく。

城壁内は面積が限られているため、門をくぐればすぐに建物が見えてくる。

それでも、アルクの家が2つ3つ収まるほどのアプローチはあるが。

「旦那様は現在公務にございますので、私が対応させていただきます」

「ありがとう。で、ルカ君だっけ？」

「はい」

押印に施されたものと同じ、白い花の蕾が並ぶ道を行きながらアルクが話しかける。

「なんか、言いにくいんだけど、もうちょっと砕けた対応してくれた方がやりやすいかなーって」

「砕けた対応ですか？」

「そう。俺こういうの慣れてないからさ。あ、でもやっぱりそういうのは王族だからしっかりしておいた方がいいのかな？」

「いえ、私自身に対しては無礼も何もありませんよ。それじゃあ少しだけ、気楽に行かせてもらいますね」

歩調を合わせながら、ルカが笑顔で答える。

ルカの絶えることのない爽やかな笑顔は、アルクに好印象を持たせていた。

「うん、ありがとう。そっちの方がこっちも楽でいいよ」

「はい、フィオンさんもよろしくお願いします」

「はい。畏まりました。以後ルカ殿のカテゴリーをアルク様のご友人に改めさせていただきます」

「え……」

突然の機械的な対応に、一瞬ルカの足が止まる。

そこにすかさずアルクがフォローを入れた。

「まあフィオンさんはずっとこんな感じだから……な？」

「……わ、わかりました。あっ、こちらへどうぞ」

装飾の施された扉を開け、アルクたちを屋敷の中へと招く。

「こ……これは……！」

そこは、まさに別世界であった。

国賓を迎えることも想定されたエントランスには豪華なシャンデリアが光を投げ、壁にかけられたいくつもの絵画はエオイア周辺の風景を巧みに描き出している。

目の前に続く階段の両端には、金色に輝く手すり。その末端には両翼を広げる小さなドラゴンの金細工が座している。

「……すげえ」

感嘆の息を吐きながら一步踏み出すと、赤いカーペットが音もなくアルクの靴を包み込む。

「おう……」

「……………」

初めての感触に戸惑うアルクをよそに、フィオンはやはり無表情のままであった。

「お二人様、こちらです」

斜め前を歩くルカに先導されながら、二人は屋敷の奥へと進んでいった。

「今回鑑定をお願いしたいのは、旦那様が趣味で集められた骨董品です。彫刻や絵画、焼き物などがほとんどなのですが、その中の一つから魔力を持つ物が発見されてまして」

広く長い廊下を進みながら、ルカが説明を始める。

「あーそういう物の魔力反応って大抵は呪いだとかだしな」

「ええ、一応文献等を調べたのですが見当たらずで……今回依頼を出すこととなりました」

「そういうことか。迂闊にあれこれ手を出せないってことか」

「はい。しかし、アルクさんはこういった物に詳しいのですか？」

疑問を口にするルカにアルクが軽い調子で答える。

「あはは、やっぱり頭よさそうには見えないかな？」

「いっ、いえ！ 決してそのようなわけでは！」

アルクの軽いジョークに、ルカが必死で頭を振る。

その様子に微笑ましさを感じながらアルクが続ける。

「まあ、そーいや言い忘れてたな。実は今回来たのはほとんど仲介って感じなんだ」

「仲介？」

「ああ。知り合いに詳しい人がいてな。端からそこに持っていくつもりだよ」

「そうですか。では、ともかく品をお見せします」

広大な屋敷を迷うことなく進み、三人は一枚の大扉の前にたどり着いた。

この部屋の周りには、装飾や調度品は少なく、その巨大さも相まって物置や倉庫のような雰囲気がある。

「こちらの部屋に置いてあります」

「すごい扉だなあ」

「簡易式ですが封印術式が確認できます」

瞬時に扉の仕掛けを見抜いたフィオンに驚きつつ、ルカが扉に手をかける。

「一瞬で見抜かれるとは……驚きですね。まあ、気休め程度ですけど……開けますね」

扉を開くと、小さな台がまず目に入った。

「って、部屋にあるのはこれだけか？」

「ええ。他の品に悪影響があってもいけませんので」

広大な部屋の中にぽつんと置かれた台に近づくと、そこには僅かな光を放つ宝石があった。

「……これは、ペンダント？」

「はい。旦那様が『画商が装飾品を持って来たのか！ おもしろい！』ということで、即金で購入されたものです」

「へー、ちなみにお値段は？」

物のついで、といった感じでアルクが問うが、ルカの返答に固まった。

「150万ほどでした」

「ひ、ひゃくご……」

繰り返しになるが、このエオイアでは慎ましく生活を送るのであれば一日100ゴールドで事足りる。

「？ 他の品に比べれば格安ですよ？」

(これが……格差かっ！)

アルクが固まっている間、フィオンが台に置かれたペンダントに近づき顔を近づける。

「さわっても大丈夫ですが、気をつけてくださいね？」

そんなフィオンにルカが注意を促す。

「畏まりました。……オブジェクトスキャン開始……魔力濃度及び、変動パターンを測定、機能及び内包術式の検査開始」

「あの……どうされました？」

「ああ、気にしないで。たぶん害はないから」

「？」

「アルク様、スキャンを完了しました」

数分間、ペンダントをじっと見つめていたフィオンがようやく目を離し、アルクへと向き直る。

「どうだった？」

「魔力パターンは安定しており、感知魔法、外部センサー類もみられません」

「つまり、触った落としたで反応はしないと」

「はい。しかし内包術式はランダムプロトコルの多重プロテクトが掛かっており、その効果は不明です」

ぽんぽんとフィオンの口から飛び出す専門用語にルカが困ったように声を上げた。

「……すみません、魔法学には明るくなくて、どういうことでしょうか？」

「いや、俺に振られても」

アルクもいくらかの技術的知識はあるものの、やはりそれは日曜大工の域を出ない。

首をかしげる二人に対し、フィオンがやや噛み砕いた説明をした。

「簡潔に申し上げますと、このペンダントは何かしらの術式を内包した装飾品となります。残念ながら術式がどういった効果をもたらす物かは不明です」

「ええと、東の国の『符術』とかと似たようなもの？」

ルカが自分の知識の片隅に残る情報を引き出して答える。

ちなみに符術というものは、あらかじめ魔方陣を紙や板に書き込むことで使用時の手間を省くためのものである。符に魔力を流し込むだけで陣に対応した効用を即座に発揮する便利なものである。

「はい。他にもアルク様が使用される弾丸も同様の物となります」

アルクが使う弾丸もまた、魔晶石内部のエネルギーを半自動的に取り出すものである。

どちらも特定の魔法効果を簡易に取り出すという点で共通している。

「よし、大体分かった」

ここまでの説明を受けたアルクが大きく首肯する。

「え？ 今ので何か分かったんですか？」

「ああ。今の俺たちには分からないってことが分かったんだ」

「はあ……そうですか」

間の抜けた返答に、間の抜けた返事でルカが返す。

「で、これを専門家のところまで持っていきたいんだけど、持ち出していいか？」

「ええ、それは構いませんが、用心のため私も同行させていただきます」

「もちろん構わないよ。じゃあ……」

「安全のため、私が運搬いたします」

「ありがとう、よし、行こうか」

フィオンが丁寧な仕草でペンダントを持ち上げ、ルカが用意した箱に仕舞う。

搬送をフィオンに任せるのは、ルカなりの信頼の表し方であった。

三人は屋敷を出て、次はアルクを先頭に道を進んでいく。

「で、専門家って一体どなたなんですか？」

ルカの当然の疑問に、アルクが返す。

「ああ、言ってなかったっけ？ 師匠……じゃなかった、フローディアさんだよ」

「フローディア……って『あの』ラボ・フローディアの!？」

ちなみに『あの』が付けられるのは、その人物の人柄によるところが大きい。

「その通り、フローディア・ミズ・アセン、結構有名人だと思うけど」

「有名人も何も、この都市のインフラ整備の第一人者じゃないですか！」

魔力変換路を基礎とする電気インフラや国内通信システムの発明は、国の内外に広く知れ渡っており、エオイアの名を広く知らしめる一要素となっている。

驚くべきことにそれらはたった一つの技術集団によってなされたのである。

それが『ラボ・フローディア』。

そしてその長がアルクが師匠と呼ぶ女傑、フローディア・ミズ・アセンである。

「ああ、そんなこと言ってたっけ。国王に泣きつかれてどうこうとか……」

「でも、どうして……」

そんな大人物とのコネクション、普通に考えればそんなものを一介のギルド員であるアルクが持っているとは思いがたい。

「ああ、俺がこうやって仕事にありつけていられるのも師匠のお陰なんだ。あれこれ基本的なことを教わったからな」

「そんな凄い方とコネクションを持っていたんですね……」

「まあ、俺から見たらそこまで大したことじゃないんだけどね」

へらへらと笑いながら話すアルクの表情が後ろからかけられた声で固まった。

「ほう、『大したことじゃない』か、大したことを言うじゃないか」

「ん？ 誰ですか？」

「警戒態勢に移行」

「……………」

唐突に後ろからかけられた声に、ルカが声を上げて振り返り、フィオンが構えを取りながらそれに続いた。唯一その声に聞き覚えのあるアルクは、声を発するどころか心臓の鼓動さえ忘れてしまったように固まった。その声の主は、肩辺りで乱雑に切られた金髪と傷跡が目立つ白い肌、そしてやつれた白衣という奇妙な出で立ちだった。

しかし、もっとも特徴的なのはその瞳。そこには悪行を成す悪魔ですらひれ伏すほどの眼力が宿っている。

「し、ししし、師匠？」

「どうした、随分と声の上擦っているぞ」

アルクの呼び方に気がついたルカが驚きをもってその人物を見上げる。

「あの師匠って……この方が？」

そしてフィオンは僅かに構えながら呟いた。

「事前情報との一致を確認、当該人物を『フローディア・ミズ・アセン』と推定」

二人にすばやく視線を投げた後、再びアルクを眼中に収める。

「……ほう、面白そうなお嬢さんじゃないか。それに王家の使用人か。愉快なお友達だな、アルク」

「は、はい……」

「こんな所で立ち話もないだろう？ 来い」

「はい！」

間髪入れないアルクの返事。それはよく躡られた犬を彷彿させる。

フローディアに先導される形で三人は進んでいき、無機質な白い工房に到着した。

両開きの扉は頑丈な金属製で、その上には真鍮の文字盤で『ラボ・フローディア』とある。

「久しぶりだなあ」

「なに、爺臭いことを言っている。最後に来たのは一月前だろうが」

アルクの感慨に混ぜ返しながら、フローディアが扉を開く。すると鉄とオイルの匂いがそこから溢れ出す。

「入れ。アルク、茶を入れろ」

「はい、師匠」

二つの命令に返事をしながらアルクが工房には行っていく。そして躊躇うルカに刃のように鋭い視線を投げる。

「あ、あの……」

「何をしている、私に用があるのだろうか？」

「……はい」

数々の重鎮を前にしたことのあるルカも、フローディアの並外れた貫禄の前にはたどたどしく返事をするしかない。

そして次はフィオンへと声をかけようとし、一瞬の間が生まれた。

「……ま、話は追って聞こう」

「アルク様の許す範囲でお答えいたします」

扉をくぐると、これまた鉄製のカウンターが目にとまる。その横には丸テーブルが置かれ、何かの用紙や筆記具が置いてある。ここまでは比較的整った様子だが、カウンターの向こうは用途不明の大小様々な工具や道具で溢れ返っている。

カウンターで書類に向かっていた男がドアの開く音に反応して顔を上げた。

「ああ、アルク君。久しぶり」

「お久しぶりです、ザルツさん」

細身で眼鏡をかけた優男風の人物に声をかけた後、そのままアルクが跳ね戸を開けカウンターの中に入る。

ザルツと呼ばれた男は、フローディアの二番弟子に当たる。

仏頂面の多いフローディアに変わり、接客応対を主に行う男である。

そして大方の予想通り、フローディアに振り回される立場にある。この点がもっともアルクが共感する部分ではあるのだが。

「ん？ どうしたんだい？ 工具はディーダが使ってるけど」

いつもと変わらぬ笑みを見せながらアルクに尋ねる。そんなザルツに軽い挨拶をしながらアルクはキッチンへと向かう。

「いや、今日はお客を連れてきただけです。お茶の用意をします」

「わかった、茶葉は青い缶のを使ってくれ。ああ、君たちがお客さんだね？」

後に続いて工房に入ってきたルカとフィオンを見て声をかける。

「はい。ベルード公爵の御息女エリザベスお嬢様の身辺警護をしておりますルカと申します」

慣れた調子で自己紹介をするルカに続いて、フィオンもドレスの裾を掴みあげながら膝を折った。

「イロナカート家に従い申し上げる、従者フィオンに御座います」

「王家の方と、その使用人が……え？ イロナカートの従者って……」

「その辺りも含めてじっくり話を聞こうということだ。ザルツ、書類を退ける」

「あ、姐さん。今お帰りですか？」

「ああ。ディーダも呼んでこい」

「分かりました」

書類を束ねてザルツが立ち、工房の奥へと向かう。それとすれ違うようにしてアルクがトレイを片手に出てくる。

「アルク様、申し訳御座いません。そのような雑用は私に御任せ下さい」

「ありがとう。じゃあ頼もうかな」

すかさず歩み寄るフィオンにアルクがトレイを渡した。

そんな様子を見て、フローディアが意地の悪い笑みを浮かべつつ問いかけた。

「ほう、随分気立ての良い子じゃないか。どこの遊郭で拾った？」

「違いますよ！」

「ふふっ、まあ良い。では、先にお客の話を聞こうか」

カップを傾け、満足そうに息をついた後、フローディアが尋ねた。